



勇者様が
友達に
なりましたように

こまちの
見ている！

機村械人
【イラスト】 榎石きさのと

試読版

GA文庫

《村人A》は普通の人生に憧れています。

《村人A》。

それが、かつて幼稚園のお遊戯会ゆうぎで僕に与えられた役名だった。

魔王の恐怖おびに怯え、魔物の侵攻うおうに右往左往さおうし、勇者に救われる有象無象うぞうむぞうの一人。

主人公の後ろで背景の一部と化す、正に脇役わきやく中の脇役。適材適所と言わんがほど、そんな役がばっちりハマるくらい、つまり、僕という存在を表現するなら、その一

言で十分だった。

* * *

敵機の大軍が織り成す弾丸の波状攻撃を雨アラレと浴び、僕の操る機体はあえなく爆発四散した。

「あ……」

闇やみに染まった大画面の中で『GAME OVER』の文字が点滅する。

溜息ためいきを一つ吐つき、両手を操作盤から離すと、僕は椅子いすから立ち上がり凝こり固まった背筋を伸ばした。長時間体を勢を固定していたため、節々の骨が鳴る。熱中していて、

時間の感覚もすっかり忘れていた。

世間的には平日の昼間だ。この辺りでは結構大型の遊戯施設といつても、周囲には殆ど人影がない。この時間帯に、大手を振るってゲームセンターで遊んでいられるのなんて、自分のような春休み真っただ中の学生か、不良かフリーターか、おジイちゃんおバアちゃんくらいだろう（最近のゲームセンターは老人の憩いの場になりつつもあるのだ）。

「まだ、門限までしばらく時間があるか……」

スマホに表示された時計を見ながら、僕——村野かずひと和人は、入学式を明日に控えた春休み最終日をゲーセンで潰していた。

ついに明日から、自分は高校生になる。別に不安だとか、そういうわけではないのだが、期待も入り混じった思いはどこか落ち着かず、そんなモヤモヤを解消するため、こうして一人で遊びにきたのである。僕にとって、ゲーセンは暇潰しひまと現実逃避にはうってつけの場所だ。ちなみに、同じく春休み真つただ中の中学生の妹に、「近くの遊園地で子猫こねことのふれあいイベントが開催されてるんだって、行こうよ!」と誘われたりしていたが、今日は気分が乗らないので断った。「まあ、小動物好きなのは良いけど、うちでも犬飼ってるんだからなあ。あまり猫の臭いにおを付けて帰ってきて欲しくないんだけど……」

ひとりごちて、今し方まで遊んでいたシューティングゲーム機の前から立ち上がる。時間はまだある。僕は散策さんさくするように、広い店内をうろつき始めた。

「……ん？」

しばらく歩いて、クレーンキヤッチャーのコーナーに差し掛かった時だった。

僕は、とある筐体きょうたいの前に立つ、一人の人物に目を奪われた。

その人は、クレーンゲームで景品を取ろうと悪戦苦闘している。

キャスケット帽ぼうを被り髪かぶの毛を纏まとめ、眼鏡めがねをかけて目元を隠している。黒地のコートを羽織はり、下半身はジーンズ

ンズ。全体的に地味じみなコーデだ。というか、よく週刊誌とかに載っている変装した芸能人とかがしている格好かっこうを思わせる。

故ゆえに、だろうか。そんな地味な格好をしていながら、彼女からはどこか存在感というか、オーラのようなものを感じるのだ。

ちなみに彼女が今必死に取ろうとしているのは、ぬいぐるみだ。『グダグダアニマル』というキャラクターグッズで、半分溶けかかったようなデザインのネコの、抱き枕まくらサイズのぬいぐるみを狙ねらっている。

しかし、前述の通り彼女は苦戦を強しいられている。全然取れそうにない。クレーンで対象の景品を搦つかんで、持

ち上げてはその場に落とす、を繰り返している。

(……あー、そうじゃなくて、ちよつとずつ位置をずらしていかないと……)

別にゲーセンに入り浸りというわけではないが、僕にだってあの手のクレーンゲームの特徴はわかる。景品自体がクレーンで運べるサイズじゃないのだ。少しずつ位置を動かしながら、穴に向かって動かしていくのが正攻法である。

操作パネルの横に積まれたコインの山が、^な為す^{すべ}術もななく見る見るなくなっていく。彼女からは、^{ふんいき}どうしていいのかわからない、^{あせ}焦りと^{ふんいき}悲しみの^{ふんいき}雰囲気^{ふんいき}が伝わってくるようだ。

……しようがない。

僕は小さく溜息を吐いた。

「あの……そのやり方じゃ、ずっとやってても取れない
と思いますよ？」

気付くと僕は、その女性に声を掛けていた。あまりの
素人しろうとっぷりに、見兼ねて口を出さずにはいられなくなっ
てしまったのだ。

「……」

しかし、彼女は話し掛けた僕の方を一瞬だけチラ見す
ると、すぐに視線を筐体の方へと戻す。そして数秒の
沈黙の後、未だに僕が彼女の方を見ている事に気付くと、
慌あわてたように声を発した。

「わ、私ですか!？」

「……いや、この距離であなた以外の誰に話し掛けるんですか」

驚いた様子の女性に、僕は苦笑交じりで突っ込む。まるで生まれて初めて人から話し掛けられた、みたいな反応だった。

「いや、さっきから見ただんですけど……この手のクレインゲームって初プレイですか？」

「え、あ、え……」

「えーっと……普通のクレインキャッチャーみたいなやろうとしちゃダメなんですよ。こづいのは——」

僕は言いながら、彼女に少し横にずれもらい、筐体の

前に立つ。そして自分の財布さいふから、先程崩して常備しておいた百円硬貨を数枚取り出し、操作パネルの横に積んで準備すると、その内の一枚を投入口に入れプレイを開始した。

「ほら、こうやって」

「あ……し、しかし、それでは少し横に動いただけでは……」

「いいんです。そもそも、搦み上げても意味がないんですよ、これ」

僕はアームを駆使し、徐々にぬいぐるみを取り出し口へと動かしていく。タグが付いていれば引っ掛ける事も可能なんだけど、この景品にはそれもない。意外と難易

度の高いタイプだった。

「こういう場所には、あまり来ないんですか？」

プレイ中の僕と、それを静かに黙って見守る女性。お互い沈黙しているのもアレなので、僕は彼女にそう話題を振ってみた。

「……………わ、私ですか!？」

「いや、だから…………この状況であなた以外の誰に話し掛けるんですか」

おそらく、歳も近いくらいじゃなかろうか。今の季節にゲーセンで遊び惚^{ほう}けているとなると、自分と同じ学生の可能性が高い。特殊な職業とかでない限りは。

「は…………はい、春休みで、時間があるので、その…………」

「春休み、という事は、高校生ですか？」

「は、はい。正確に言うと、今はまだ中学校を卒業した身で、明日から都立門前もんぜん高校に入学が決まっております……」

「え!？」

その発言に、僕は思わず声を上げてしまった。彼女はびっくりしたように体を震わせる。

「あ、ごごご、ごめんなさい!」

「いや、別に謝らなくても……驚いたんですよ、僕も門前高校だから」

「え、じゃあ、同級生の方、ですか!？」

偶然とはあるものだ。彼女は、僕が明日から通う予定

の高校の新入生……つまり、同期生だったのである。これには流石さすがに、お互い盛り上がる。

(……しかし)

興奮した様子の彼女の姿を、改めて見直す。先程述べたように、全体的に地味な服装をしているが、間近で見ると、やはり結構美人だとわかる。眼鏡の奥の瞳ひとみや、帽子の縁ふちから覗のぞく黒髪や、コートで隠している体の線など、どのパーツもレベルが高い。あと意外と……胸も大きい。

(……こんな美人が、明日から同じ高校に通うのか)

この変装チックな格好といい、もしかして現役アイドルとかだったりして……。

などと、想像を膨ふくらませている内に——ついに、僕

は狙いの景品を獲得する事に成功した。

「おお……す、凄^{すご}いです!」

賞賛^{しょうさん}の声を上げ、キラキラとした視線を送ってくる。

僕は、巨大なぬいぐるみを取り出し口から引っ張り出すと、彼女へとそれを渡した。

「はい」

「え……あ、でも、お金が……」

「いいですよ、僕が勝手に取っただけですし」

ほら、と、僕が促^{うなが}すと、彼女はおずおずと手を伸ばし、

ぬいぐるみを受け取った。両腕で抱き締めるようにして、猫の頭に自身の顔を埋める。

「あ、ありがとっ!」ぎゅっ……一生の宝ものにしてま

す」
大袈裟おおげさな。でも、その所作しよさといい言葉といい、ドキドキするものがある。

とはいえ、これで僕の役目は終了だ。景品を取る事に成功したわけだし、これにておさらばというのが普通の流れだろう。そう、思っていた。

「あの……」

だが、そこで彼女は、別れの雰囲か気を醸かもし出した僕へと、自ら声を掛けてきた。

彼女はぬいぐるみを抱きかかえながら、片方の腕を伸ばし、近くに設置されているエアホッケーを指差す。

「ん？ あれが、どうかしたんですか？」

「……あれで一度遊んでみたくて」

「ふーん、随分ずいぶんとレトロなゲームが好きなんですネ」

僕は考える。時間ならまだ十分にあるし、断る理由も特にない。

「いいですよ。但しただ、僕も別にそこまで得意なわけじゃないですから、それでもいいなら」

「……! はい! ありがとうございます!」

というわけで、僕達は一緒に遊ぶ事にした。彼女の腕前は本当にずぶの素人で、故に、僕は彼女にアドバイスをしながら、色々なゲームと一緒にプレイする事となった。

エアホッケーで一通り遊ぶと、次は比較的最近のゲー

ムコーナーへと移行する。

——リズムゲーム。

「あ、う、こ、これは、結構難しいですね……」

「とか言いながら、結構合わせて点数稼かせげてるじゃないですか。才能あるのかもしれないですよ」

「反射神経には自信があります！ 任せてください！」

——ゾンビシューティングゲーム。

「ああ！ 隣の部屋からも腐くさった死体が！ ここは私に任せて先に行ってください！」

「いや、協力プレイだから、あなたも来ないと先に進めないですよ……」

——スクロールアクションゲーム。

「体力が残り少なくなっています！ 私が敵を殲滅して

いる内に早く回復アイテムを！」

「なんだか、時々発言が頼もしくなりますね」

その後も、レーシングゲームやメダルゲームや……時間
間も忘れて、僕達は遊び回り……。時

気が付けば、時刻は夕方に差し掛かっていた。

「結構盛り上がりましたね」

「は、はい……今日は、本当にありがとうございました」

時間を確認していた僕に、彼女はペコリと頭を下げる。

同年代とは思えないくらい礼儀正しい行動に、僕は若干

気後れした。

「とても楽しかったです。私……こうしてゲームセンターで遊ぶのが、昔からの夢だったので」

「また随分ずいぶんと変わった夢ですね……」

しかし、疑問には思わない。まるで本当に、生まれて初めてゲーセンで遊んだ人間のような反応だったし。

「じゃあ、僕はこれで」

そう言って、僕は彼女の前から立ち去ろうとする。

「あの……」

そんな僕へと、彼女は声を掛けてきた。

「なんだろう？ まだ遊び足りないのか？」

「悪いですけど、そろそろ門限なんです」

「いえ……その、お願いがあるのですが」

お願い。小首を傾げる僕に、彼女はおずおずと、どこか振り絞るように言う。

「明日から、私と、その……トモダチに……」

「え？」

あまりにも小声過ぎて上手く聞き取れなかった。僕は彼女を振り返り、聞き返すため一歩近付く。

そこで、だった。

「お？ なになに、もうお別れなのお？」

背後から聞こえた声に、僕は嫌な予感を覚える。それなりに上昇していた心のテンションゲージがダダ下がりしていく感覚。振り返ると、予感的中していた。ニヤニヤと笑みを浮かべた男達が三人。年齢は僕達よ

りも少し上くらいか。染めた髪に黒と灰色を基調とした攻撃的なフアッション。じやらじやらと身に着けたアクセサリーに、刺激臭の強いクールミント系の香水。いかにもベタな不良達だ。

「せっかく、『まだ帰りたくなーい』ってわかりやすく伝えてんのかなあ。こんな彼氏じゃつまんねーだろ?」
「じゃあ、俺おれらがもっと楽しい所に連れてってやろうか?」

「いいねえ」

駄だ弁べんり、笑い合う男達を前に、僕は内心で嘆息たんそくする。

おそらくこいつら、特に何も考えず、暇潰しの感覚で適当からに絡からんできたのだろう。ゲーセンでこういう事をす

る輩やからは、大概たいがいそんな感じだ。

(……まったく、面倒臭めんどうくさい事態になっただな)

何とか穏便おんびんに済ませないといけない。これがカツアゲとかで、たかられているのが自分だけならまだしも、今回は一人じゃない。

こんなガラの悪い連中に近付かれて、彼女も怯おびえているんじゃない、

……と思っただら。

「うお……」

僕は、不良共を前にした彼女の纏う雰囲気、明らかに変化している事に気付く。地鳴りのように伝わってくるのは、ピリピリとした痛みを伴ともなうほどの鳴動めいどう。

これは……怒っている？

三人組の男達に対し、一步も引かず、臆おくする事もなく、彼女は反抗的な視線で睥睨へいげいしている。その姿勢に、逆に不良達がたじろいでいるほどだ。

「な、なんだよ、こっちは親切で……なあ？」

「お、おう、寂さびしそうだと思っ
てよお……」
ビビっている不良達は、まるで恐怖を紛まぎらわせるかの
ように、互いに声を掛け合う。その様子を見て、僕は心
の中で彼女に叫ぶ。

もういい！ もうそこらへんにしとくんだ！ 無視し
て帰って！ こいつ等らも、もう結構およ及び腰になっ
てるから、それ以上挑発しちやダメだ！

しかし、彼女は引かない。ギツと、直立不動の姿勢のまま動こうとしない。

「……お前、いい加減にしろよ」

その時、先頭に立っていた男が低い声を漏らした。ま
ずい、やり過ぎた。

「その生意気な目は何だよ、アア!?」

逆上したそいつは、彼女に向かって腕を伸ばす。

ダメだ!

瞬間、僕はすかさず、その不良と彼女の間飛び込んだ。彼女へ放たれた不良の腕は僕の肩に激突。結果、突き飛ばされた僕はゲーム機に激突し、床に尻餅しりもちを付く形となった。

彼女は驚き、すかさず僕へと駆け寄ろうとする。

だが、それよりも早く。

「なんだよ、お前、何かっこつけて——」

「バツカ野郎！」

僕は不良達に向かって勢い良く叫んだ。ゲーセン中に響き渡る怒号^{どごう}。間近にしゃがみ込み、僕の肩に触れていた彼女も、驚いて手を引っ込めた。

「手を出したら後に引けなくなるだろ！ 僕はいい！

でも、僕以外の人間に直接的な被害が出たらどうしようもなくなくなっちゃうぞ!? 最悪警察沙汰^{ざた}だ！ こういう事

するんなら少しは考えて行動しろ！」

僕が何を言っているのか理解できていない不良共。ま

あ、半分心の本音が漏れてるからな。でもそれでいい。今はともかく、煙けむに巻まく事が優先だ。

「ともかく、彼女は関係ない！ ちよつとこつち来い！

ここじゃ迷惑だ！ 裏で話つけてやる！」

言うが早いか、僕は気圧けおされている不良共をゲーセンの入り口へと押していく。

「ここは僕に任せて、君はもう帰れ！ 大丈夫だから！」
後方でぽかんとしたままの彼女を放置し、僕達はゲーセンを出て、足早に路地裏へと向かう。

……よし、とりあえず彼女からこいつらを引き離す事には成功した。

ここからが、僕の本領発揮だ。

* * *

「すいままっせんでしたあああああああああああ
ああ！」

左右をコンクリートの壁に挟まれ、薄暗く湿った裏路
地に、渾身の雄叫びが轟いた。

僕は直立不動の姿勢で腰を折り、深々と頭を垂れて謝
意を表している。

「調子乗った事言っつてすいませんでしたッ！この通
り！どうか、どうか穏便にすませてくださいッ！」
不良達も、僕の気迫たっぷりの謝罪に引いている。先

程までの好戦的な態度から打って変わってのこのザマに、完全に混乱している様子だ。

「な、何なんだよお前……恥ずかしくないのかよ」

「いえいえいえいえ！ 先刻は往来の手前、あのように格好を付けた事を言ってしまったが、私なんてゴミクズの三下さんしたでございます！ あ、よろしければお金もお渡しいたします！ 全財産持って行ってくださーい！ 二千円くらいしかありませんけど！」

「……おい、もういい、行こうぜ」

完全に気を削そがれた不良達は「なんだこいつ」「意味わかんね」などと呟つぶやき、気味悪そうに僕を一瞥いちべつすると、去って行った。

「……ふう」

そんな彼等の姿を見送ると、僕は頭を上げ、腰に手をやる。

一件落着。事態は丸く収まった。

喧嘩なんて以ての外だ。何事も、大事にしないに越した事はない。

「普通で平穏が一番だ」

自身の座右の銘を呟いて、僕は一人微笑する。

——そう、僕は「普通」を望んでいる。

僕は地味な存在だ。個性皆無の中肉中背、ヴィジュアルも平均、秀でた才能も特になし。幼稚園のお遊戯会で与えられた役柄でさえ《村人A》だった。

だが、その経験がある意味、今の僕の人間性を形成したといつても過言ではない。

《村人A》——それの何が悪い。

そう、普通であるという事は、どれだけ素晴らしい事なのだろう。

まず第一に、普通の人生というものは平和そのものだ。可もなく不可もないという事は、大きなプラスこそないだろうが大きなマイナスもない。重責に苛やまれる事も、アクシデントに巻き込まれる事もない。

連日、テレビや新聞を賑にぎわせる、大物政治家や大物芸能人、人気アイドル、スポーツのスタープレイヤーのスキャンダル。ついこの前まで絶賛の言葉で持ち上げられ

ていたと思ったら、掌てのひらを返したような凄絶せいぜつなバツシングを受けて、世間の晒さらし者となっていたりする。彼等彼女等が大物で人々から注目される立場ゆえに、その行動がメディアを通して殊更ことさらにに叩たたき台に上げられてしまっているという事である。

故に、思う。

普通を極める事こそ——幸福への最大の近道なので
は？

普通の人間こそが、この世で最も健康的な存在なので
は？

それ以来、僕は普通を追求しようと思っただけで
没個性で目立たない、これといって特徴のない平凡な人

生を、僕は願っているのだ。

周囲で大掛かりなイベントや大事件なんて起こって欲しくない。何も起こらない事こそが、最高なのである。

先程だって、今日偶然知り合ったあの女の子が、彼女と間違えられてしまった事が起因だ。確かに美人だったかもしれない。一瞬でも、「こんな青春も良いかも」と思ってしまったりもした。

が、この経験から悔い改める事にしよう。そういう存在は、やはり「普通」を遠退とおのかせる原因と成り得る。近付かない方が吉だ。彼女には、たとえ高校で再会しても、必要以上に接近する事のないように気を付けよう。

考えながら、路地裏を後にする。自分が今し方入って

きた方向に行けば、彼女と再会する恐れもある。故に反対の方向に向けて。

僕は夕暮れに染まりゆく街中を、帰路に着いた。

* * *

そんな、村野和人の一方――。

「……」

路地裏の入り口。

その陰に立った一人の少女が、巨大なネコの抱き枕を抱きかかえながら、去っていく彼の姿を静かに見詰めていた。

桐条莉央は《勇者》です。

都立門前もんぜん高校は、この僕に打って付けと言わんばかりの、ザ・普通の公立高校である。

偏差値へんさち——50。

近年の部活動の主な実績——ブラスバンド部全国大会都予選、銅賞（三位）。

校風——『のびのび、すこやかに』。

校長の名前——田中たなか一郎いちろう。

正に普通。パンフレットを読んだ瞬間、ここしかない

と決心した。

この学校で、一層じゅんぷうまんぱん順風満帆な普通ライフを送ろう——
自宅の勉強机で入学案内を眺ながめ、そう決意した事を思い出しながら、僕はパイプ椅子いすの背もたれに体重を預ける。
今日は、その門前高校の入学式だ。

田中一郎校長による長々ながながとしたスピーチや、在校生からの後輩こうはいへ向けたメッセージの読み上げ等……多分たぶんに漏もれず、至って普通の入学式はつつがなく進行していった。

『続きまして、新入生挨拶あいさつ。新入生代表、桐条莉央とうじょうりおさん、壇上だんじょうへどうぞ』

「……へ？」

新入生からの挨拶——新入生代表として、〃その名前
〃が呼ばれた瞬間、僕は思わず、そんなマヌケな声を漏
らしてしまった。一瞬、聞き間違いかとも思った。

「え？ 今……トウジヨウリオって……」「うん、っってい
う事は、やっぱり……」「嘘^{うそ}!? 本当に、あの〃莉央様〃
が、この学園に!？」

館内にざわめきが広がっていく。

そんな中、一人の女子生徒が壇上へと姿を現した。

入ってきた時から館内は妙に薄暗く、唯一の光源は壇
上を照らすスポットライトだけだった。違和感こそ覚え
たものの、それ以外は至って普通の進行だったため、気
にも留めなくなっていたが……そのライトに照らされて、

彼女の身が全校生徒の前に晒さらされる。

その姿を見て、僕は……いや、僕のみならず、その場にいた、生徒も教師も保護者も関係者も含めて、すべての人間が、思わず溜息ためいきを漏らしてしまっていた。

正に女神を彷彿ほうふうとさせる美しさだった。門前高校の女子用の制服こそ身に着けているが、艶あでやかな漆黒しゅくこくの長髪、理知的な切れ長の瞳ひとみ、透明感のある肌、メリハリのあるスタイル……。

清廉可憐せいれんかれん。秀麗皎潔しゅうれいこうけつ。そんな言葉を使っても表現が追いつかない。

首元には赤色のリボン。そして腰には、莊嚴そうげんな剣けんを装備していた。

大袈裟おおげさではなく、どこか、輝いてさえ見える。壇上に立った彼女は、まるで背中から後光ごこうが差しているかのようだった。存在感すごというか、居様いさまというか……ともかく、オーラが凄すごい。

『………あっ、し、新入生挨拶、桐条莉央さま……さん、お願いいたします』
司会を務めている女性教員が、そこでやっと我に返り、彼女に挨拶うながを促す。

桐条莉央は壇上のマイクの前に立ち、その黄金比で形作られた姿を全校生徒の方へと向ける。体の前で両手を重ね、屹立きつりつする姿はまるで彫刻のようだった。

「……日の光うらかにさす春の訪れとともに、私達は

都立門前高校の新入生として入学式を迎える事ができま
した。校門から校舎まで続く道沿いに咲き誇る桜の花と、
散った花びらが絨毯じゅうたんとなり、私達を歓迎してくれている
かのようでした」

麗うるわしい唇が声を奏かなで出すと、先程までざわめきに支配
されていた館内は、水を打ったように静まり返った。彼
女おんなの声を、まるで極上の音楽に聞き入るかのように皆
が静聴せいちょうしている。

「本日は、私達のために、このような立派な入学式を開
いていただきありがとうございます。新入生一人ひとり
は、これから始まる高校生活に期待と不安で胸がいつぱ
いです。門前高校に入学し、これから私達は……」

キリツとした目鼻立ちも手伝い、女子高生の姿をしな
がらも、その威風堂々とした雰囲気はこちらの神経を引
き締まらせるものがある。まるで歴戦の兵のようだ。
さて——彼女は一体何者なのか。無論、僕も知って
いる。

これだけの注目と歓声を浴びて登場した人物……先に
言っておくが、アイドルとか芸能人とか、そういった類
の人種ではない。全然違う。正に次元が違う。
彼女は……。

「莉央様……莉央様だ……」
「マジだ……あの伝説の」
「勇者」の……桐条莉央様」

彼女は——《勇者》。

比^ひ喩^ゆだとか綽^あ名^だだとか、そんなレベルのものではなく。桐条莉央は、かつて魔王の軍勢に平和を脅かされていた。《異世界》を、たった一人で救った、正真正銘の《勇者》なのである。

文字通り、彼女の力により異世界は救われ、その功績が、この国と異世界との交流の橋渡しとなった。今では、この国は異世界と深い繋^つが^なり^を誇^こ示^じしており、一種の同盟関係にあるといつても過言ではない。

そんな話は、当時世間を賑^にわ^せていたため自分もよく知っている。ただ、自分にとっては、半信半疑もいと

ころだった。いきなりそんな事を言われても、ある日UF0が地球に降り立ち、宇宙人が友好関係を結びに現れた、と言われているような、そんな荒唐無稽こうとうむけいな話だったからだ。

信じられないというより、理解しきれなかったと言った方が正しいかもしれない。だから、桐条莉央という存在自体、なんだか架空の人物のように思えて、そこまではつきりと意識した事はなかった。

そんな彼女が、今、目の前にいる。この上ない衝撃だった。

加えて、僕の中ではもう一つの疑念が生まれ始めていた。それは――。

(……この声、どこかで……)

彼女の発するその声音に、聞き覚えがあつたのだ。つい最近、ほんの少し前に聞いた記憶がある——妙に覚えてい、そんな声。

ふと、脳裏のうりに、昨日きのうのゲームセンターでの出来事が想起される。

(……まさか)

地味じみな服装を着込んだ、あの女性の姿。

壇上こうごうに立つ、神々こうごうしく輝く《勇者》の姿。

その二人の姿が——重なった。

(……いやいやいやいや! 早とちりするな、そんなわけ……)

僕が想像を巡らせている間にも、桐条莉央の美辞麗句びじれいくに富んだ挨拶は進行していく。

「今後の人生における成長の糧かてを求め、更なる抱負ほうふや決意に向かつて邁進まいしんしていく事を目標とします。これからお世話になる先生方、先輩方、私達新入生を温かい目で見守り、ご指導くださいますよう、よろしくお願いいたします」

言い終わり、一礼すると、館内は割れんばかりの拍手はくしゅで支配された。正に完璧かんぺきな挨拶。しかし、彼女のスピーチはそこで終わらなかつた。

「……最後になりましたが、今年より、この門前高校には、異世界から文化交流のため多くの留学生が訪れま



す」

……ん？

今、なんて？

僕は我が耳を疑った。

どよめく館内。と同時に、体育館の薄暗い照明が解除され、はつきりとしていなかかった後方が見えるようになってきた。僕は振り返る。振り返って、そして、今度は我が目を疑った。

そこに座っていたのは、異世界の住人の皆さん。

亜人やモンスター、風変わりな衣装を纏まとった人物達等

……文化交流のため、この国にやってきた異世界からの新入生達だろう。ちなみに、そんな彼等彼女等も、起こ

しているリアクションは現世の人間と一緒にだ。その場に
いる全員が、壇上に立つ桐条莉央に見惚みとれている。うっ
とりと、まるで神を前にしているかの如ごとく。

異世界と現世の融合。現実とファンタジーの邂逅かいこう。そ
の神秘的な光景に、場にいるすべての存在が興奮を見せ
始める。

そんな中、僕は絶句していた。どうやらすべてが秘匿ひとく
で進められていたようで、今日この瞬間が、初発表だっ
たようだ。知らなかった。こんなもの、驚かないはずが
ない。というか、こんな事を知っていたら、絶対に進学
なんて決めなかった。

——こんな、普通とは掛け離れているにも程がある

学校に、くるはずがなかった。

「加えて、私のように、かつて異世界を救うためにしょうかん召喚された冒険者の方々も、新入生として多く進学をしています」

後方で、桐条莉央の言葉が続けられる。

「この《勇者》——桐条莉央が、現世を代表し、彼等彼女等に誇れるような学園となるよう、こころざし志を持って生活を送りたいと思います」

新入生代表の挨拶が勇壮な言葉で締め括くくられると、館内は喝采かつさいと《勇者》を賞賛する声援で満たされていく。

そんな熱量の中、僕はただ一人、目の前の現実に対して呆ほうけている事しかできなかつた。

* * *

「何が普通の高校だ……ふざけるな、田中一郎」

場所は、新入生……即ち、新一年生、一組の教室。

入学式を終え、割り振られたクラスへとやってきた僕は、早々に自分の席について項垂うなだれていた。

今、僕の周囲……つまり、クラスの中には、人間人外を問わず、様々な種族が犇ひしめき合っている。

向こうの世界の住人達は、初めて訪れた現世にどこか興奮した様子で、そしてこちらの世界の人間達の方も、そんな彼らの姿に興味津きょうみしんしん々の様子で、互いの距離感を測

りながらコミュニケーションを取っている、といった感じだ。

動揺どうようも少なからずあるだろうが、基本的には皆がこの展開を楽しんでいる。現世側の生徒の中には「なんだか、RPGゲームの世界みたいで楽しいね」などとはしゃいでいる者もいる。だが、僕にとっては迷惑な話だ。

僕はファンタジー系RPGなんて望んでいないんだよ！

学園シミュレーションゲームがしたいんだよ！

しかも特殊イベントのまったくない、モブ視点で進行するようなやつ！

多分、僕くらいにしか需要はないと思うけど！

……ともかく、僕がここだと選んだ普通のはずの学校は、濃ゆい世界観へと変貌へんぼうしてしまっていた。こんなものの、落ち込まずにはいられないだろう。

加えて。

「……しかし、まさか、なあ……」

まさか自分が昨日、あの《勇者》と出会っていたなんて……いや、まだ確定したわけじゃないけど。アイドルとか芸能人とか、そんなレベルの人物じゃなかったわけだ。

(……もしそんな人と知り合いにでもなっていたら、それこそ目立って仕方がない。昨日の内に、そこまで深く関わらなくてよかったのかもしれない)

と、ポジティブな方向に思考を転換していた僕は、ここで教室内の空気が一気に変容したのを感じ取った。

どこからともなく歓声が聞こえてきた。何事か――

と、視線をクラスの入り口の方へと向ければ、その理由は一目瞭然いちもくりようぜんだった。

桐条莉央が、そこにいた。

「うあ……」

と、思わず声を漏らしてしまった。先刻の入学式、壇上に立つ姿を見ていた時よりも距離が近いゆえに、その華々はなばなしさというか、煌きらびやかさというか、存在感をより一層味わわされる。

彼女が教室へと入ってくる。

(……うおお……改めて見ると、やっぱり美人だなあ……)

スツと通った鼻梁びりょうと、横に引かれた薄い唇。少し目尻めじりの上にながった両目に、漆うるしのような光沢こうたくを持つ黒髪。同年代女子と比べても、明らかに発育したプロポーション。本当にこの世のものなのかと思えるような、絶世の美女。

これでしかも《勇者》などという称号まで持っているのだから、神話の中の人物が目の前に出現したかのような、そんな感覚おちいに陥おちいるのも仕方がないだろう。腰の『聖剣せいけん』も手伝って、なお一層だ。

……こんな現実離れした存在が、あの日あの時、自分のすぐ隣にいたなんて、考えられない。

(…… やっぱり、全部僕の妄想もうそうなんじゃないか？ とうか、百歩譲ゆずつてそうだったとしても、向こうが僕なんかの存在なんて覚えてるわけ……)

などと考えている内に、彼女は教室内を進む。歩いて、真まっ直すぐ、窓辺の方へとやってきて……。僕ぼくの隣の席に座った。

「 …… 」

…… ん？

見る。横に桐条莉央がいる。椅子に腰を下ろし、真まっ直すぐ前を向いている。

…… 。

《勇者》が僕の隣の席なのかよ!?

っっていうか、ちよつと待って!?! 莉央様と同じクラス!?

しかも更に更に言えば、彼女の席は窓際の一番後ろ
……隅すみの席。つまり、〃隣の席〃の立場になっているの
は、実質僕だけという事であり……。

「……何アイツ、邪魔じやま。莉央様が見えない」「なんであんな
冴さえない男が莉央様の隣の席なのよ」「ちよつと、あの
男子、莉央様と距離が近すぎない?」「身の程わきまを弁わえてと
つとと退きなさいよ」「消えろ。空気読め」「確か隣の席
は……村野和人むらのかずひとね、ふーん……」「奴やつを殺せば莉央様のお
姿をもつとハッキリご拝見できると……」

「……」

殺気^{ちつき}立っているクラスの空気を感じ取り……僕は頭を抱えて机に突っ伏す。

……あー、くそ、僕の平穏な学校生活が……。

……。

……？

そこで、僕は気付く。何だろうか……妙^{みょう}に視線を感じる。

しかも、今までにないほど強烈な視線を。

これは……いや、まさか……。

僕は左隣へと視線を流す。

——莉央様が、僕を見ていた。

あの目鼻立ちの整った綺麗^{きれい}な顔がこちらを向き、至近

距離で、ジーンと僕を見詰めている。めっちゃ見てる。

「あ、あの……何か……」

その視線に気づき、僕は恐る恐る彼女に話し掛ける。莉央様は、手にしたプリント……クラス名簿に視線を落とし、そしてすぐさま僕へと向き直る。

「……村野さん」

《勇者》が、僕の名を呼んだ。どこか緊張を孕^{はら}んだような、何かを期待するような、そんな思いが伝わってくる音色で。

「あの、昨日の事、覚えて……」

僕は咄^{とつ}嗟^さに視線を逸^そらした。

（……やっぱりそうだ！ 昨日ゲーセンで出会ったのが

彼女だっただんだ!」

「なに、あいつ。莉央様と軽々しくお話するなんて
……」「隣の席になっただからって、ちよつと調子乗り過ぎ
じゃね?」

「まだ悪口が聞こえてくる! このポジション、悪目立
ちして仕方がないじゃないか! 会話するのもダメなの
!?!」

「あの……村野さん」

左隣から、莉央様が話し掛けてくる。しかし、それに
反応するわけにはいかず、僕は徹底的に無視を決め込む。
机の上で腕枕まくらに顔を埋め、急激な眠気に襲われ眠ってし
まったふりをする。

やがて、向こうも諦めたのか、声は聞こえなくなつた。
とりあえずこれで、彼女からの接触という厄災やくさいからは
逃れる事ができたようだ……。

「ちよつと、あいつ、莉央様に話し掛けられてるのに居
眠りしてるわよ」「完全に舐なめてる。肅清対象ね」
……無視したら無視したで、この言い草である。
どうすればいいんだ……。

* * *

こうして正真正銘、僕の普通とは掛け離れた——異
常な学園生活がスタートした。

亜人、半獣、異世界の住人達と、そんな異世界にかつて召喚された経験を持つ、どこかクセのある元・冒険者達が集まっている、平穏とは掛け離れた高校。

無論、そんな日々を楽しむ余裕など、僕には一ミリも許されていない。

あの《勇者》桐条莉央と同じクラス……更に言えば、隣席になってしまったのだ。〃莉央様の隣の席〃という時点で、嫌でも目立ってしまうのである。しかも、悪い方向に。

周囲から向けられてくる、痛いほどの殺気。そんな中に晒され続けられる僕の心労がどれほどのものか、想像できるだろうか？

自己紹介の時間、「趣味や特技は特にありません。中学時代、部活動にも所属していませんでした。こんな特徴のない普通の僕ですがよろしくお願いします」と、あたりさわりのない挨拶をしたのだが……「へえ、莉央様の隣の席になつておきながら、普通」ねえ……」「ちよつと調子乗り過ぎじゃね?」「処す?」「処す?」「奴を殺せば莉央様のお吐き出しになられた二酸化炭素をより多く吸引できる……」「といった様子で、より一層ヘイトを集めてしまった。もう何をやっても無理だ。

クラスメイトから嫉妬しつとと非難の目を向けられ続ける毎日。

更に、それに一層拍車はくしやを掛けていくのが……。

(……まだ見てる)

机に突っ伏し、顔を右側へと向けている僕の後頭部に——強い視線を感じる。

莉央様が僕を見ているのだ。

まるで訴え掛けるように、ただただジーっと見詰め続けている。そんな事をされたら、いくら僕が関わらないようにしたって、嫌いやでも周りが騒いでしまう。

(……あれから三日……最近、この視線の圧も日増しに強まってきた気がする)

しかし、ここまできると逆に気になつてくる事がある。どうして彼女はそこまで頑かたくなに、僕に接触をしようとするのか？

(……まさか)

そこで、僕の脳裏のうりに一つ、恐怖の可能性が浮かんだ。

(……まさか、この前のゲーセンで、無意識の内に彼女に何か失礼な事をしてしまったのではないか?)

ゲームの協力プレイ中に、実は肘ひじが胸に当たっていたとか? 有り得る、彼女、結構な巨乳だし。それで、怒らせてしまっているのではないか?

だとすれば、莉央様はその怒りの矛先ほこさきとして、先日から僕を睨にらみ続けているのでは?

(……だとしたらマズいぞ……より一層最悪だ。彼女に不手際を働いてしまったなんて知られれば、今以上に悪目立ち……いや、殺されかねない!?)

とりあえず、一旦冷静になつて記憶を遡り、分析しよう。さかのぼ

時刻は四時間目が終わり、昼休憩きゆうけい——時間はたつぷりある。

僕はとりあえず教室から離脱するため、顔を上げて椅子から立ち上がる——。

目前に莉央様が立っていた。

「おおわっ!」

びつくりして悲鳴を上げてしまった。瞬間、教室中の視線がこちらに集まる。

しまった——と思う間もない。クラス中が、僕と、僕を前に屹立する莉央様の姿に注目する。

動けない。蛇へびに睨にらまれた蛙かえるとは、正にこの事だろう。彼女もまた、沈黙し、僕を見据みすえるばかりだ。

つ、ついに直接的に接触を凶むつつてきた!?

僕に何をする気だ、桐条莉央!?

静寂せいじやくに包まれる教室内。

やがて……彼女はゆっくりと、口を開いた。

「……………」

……………??

瞬間、莉央様は目を見開いて。

「……………」
はっー!」

この世のものとは思えない声を吐き出した。

……。

……呪文!?
じゅもん

「申し訳ありませんッ!」

気付くと僕は、全力で謝罪の言葉を叫び、教室から逃げ出していた。

もう無理です! 限界です! 精神的に耐えられませんか、一回休ませてください!

ともかく一つ、確実にわかった事がある!

やはり莉央様は怒っている! アレは呪文に違いない! 魔法か何かで僕を攻撃しようとしていた!

ともかく一旦^{いったん}、一人になろう！　そして、自分が彼女にどんな失礼を働いたかよく思い出そう！　そして誠心誠意謝れば……。

「村野さん」

横を見る。

莉央様が、廊下^{ろうか}を全力疾走^{しつそう}する僕に並走していた。

「村野さん……足がお速いのですね」

「うあああああああ！」

「逃げ足の速い奴め〃と言われた気がして、僕は恐怖に^{おのの}慄^{おのの}く。

逃げる。ともかく全力で逃げる。

「村野さん」

しかしフエイントを入れたり、ジグザグに走っても、彼女はぴったりにくつついて離れない。途轍とてつもない身体能力だ。その間、何度も名前を呼ばれる。まるで獲物を精神的に追い詰めるかのように。

「村野さん」

「ちよ、ちよっと！」

僕は思わず、逃げながら叫ぶ。

「何なんですか!? 僕にいつたい何の恨みうらみが……」
そこで、僕は自身の体が無重力に投げ出されたのがわかった。

「あ……」

階段から落ちていた。前を見ず、突っ走っていたばかり

りに。浮遊する身体。下の方から通行人の悲鳴が聞こえる。

すべてがスローモーションに感じた。そんな中、僕の視界には、依然、桐条莉央がいた。

「な、ん——」

追いついた莉央様が一気に跳躍し、こちらに向かって飛んでくる。空中で腕を伸ばし、そのまま僕を優しく抱きかかえる体勢となった。お姫様抱っこだ。

ふわりと、まるで風に包まれたような感覚を味わいながら、僕等は下の踊り場へと無事着地を果たした。

「……大丈夫ですか？ 村野さん」

密着した体同士の感覚。至近距離に迫った彼女の顔。

そのすべてに、意識が奪われる。思わずボウっとしてしまった。

直後、その華麗かたれいな一部始終を見ていた周圀の生徒達から、拍手喝采が上がる。

「……は！」

今だ！

目を覚まし、状況を再認識した僕は、湧き立つ周圀の反応に気を取られている莉央様の隙すきを突き、彼女の腕の中から脱出する。

そしてそのまま振り返る事なく、再び全力で走り出した。

* * *

「はあ、はあ……」

逃げて逃げて、走って走って、僕は裏庭へと辿り着いていた。

陽の光もあまり届かない、校舎の裏手だ。

「ここまですれば……」

と、一時的ながらハンターの恐怖から脱した安堵を噛み締め、壁に手を当てて息を整えていた、その時だった。「きゃあっ！」

行く手の方向から聞こえた声に、僕はびくつと体を揺らす。

今のは……悲鳴？

気になり、声の聞こえてきた方へと進む。その先には、校舎の設計上、ちょうど袋小路のような形となっている突き当たりが存在し、僕は壁沿いに顔を覗のぞかせる。

暗闇くらやみの中で、一人の女子生徒を三人の大柄な生徒が取り囲んでいた。

しかも、よく見れば……。

(……人間じゃない……)

女子生徒は見たところ、普通の人間だ。しかし、それを囲う男子達は違った。

全員が、この学校の制服を纏っているが、その頭部や手や足が、灰色の体毛おおに覆われている。

確か……そう、教室で他の生徒が話していたのを聞いた記憶がある。

《人狼》^{ウルフマン}——そう呼ばれる、狼と人のおおかみの混じった、好戦的な種族。異世界の住人で、入学早々、何やらよからぬ揉^もめ事を方々で起こしているらしい。

「なあ、いいだろ？」

そんな《人狼》^{ウルフマン}の一人が、何やら猫撫^{ねこな}で声（狼だけど）で話し掛けている。

「いやあ俺達もな、この世界に来たばっかでさあ右も左もわからねえんだよ」

どこかおどけたような声の調子。まあ大体、目的は察しが付く。

「社会勉強が必要だよお。そのための資金をくれって言
ってんだ」

怯^{おび}える女子生徒の顎^{あご}を、その鋭い爪が生^はえた指で持ち
上げる。

「ケチケチすんなよ、協力すると思っでよ。さもないと、
俺達怖くて怖くて……何するかわからねえからよ?」

大きく裂けた口元を吊^つり上げ、下卑^{げび}た笑みを湛^{たた}える。
「何分、常識つてもんがわからねえからさ。この場で、
いきなり暴れ出しちまうかもなあ」

……なんだか、ガラも頭も悪そうな連中だな。

異世界の住人には、あんな感じのもいるのか。

僕は顔を引っ込めると、小さく嘆息^{たんそく}する。正直、気分

の悪いものを目撃してしまったと思う。

だが申し訳ないが、こういう厄介事に首を突っ込んでいる場合ではない。僕も僕で、色々と問題を抱えているのだ。

涙目の女子生徒には悪いが、ここは立ち去らせてもらおう……。

思い、僕はきた道を振り返る。

遠くの方、自分を捜している莉央様を発見した。

「……どわ！」

まずい！

キョロキョロと周囲を見回している様子から察するに、まだ僕の事を見付けてはいないようだが……今出て行っ

たら捕捉ほそくされる!

彼女の追跡から逃れるため、僕は慌あわてて袋小路に飛び込んでしまった。

結果——。

「あ?」

……見付かった。

女子生徒は驚いたような目を、《人狼ウルフマン》達も訝いぶかるような目を、僕に向けてくる。

あー、もう! 前門ぜんもんの虎とら、後門こうもんの狼だ!

(……だあああー! しかたない! こうなったら……)

「おい、お前——」

「あ、ご、ごめんなさい、お取り込み中でした!」
《人狼》^{ウルフマン}の一人が何かを言う前に、僕はおどおどした態度で台詞^{せりふ}を述べる。たまたま偶然、この場に居合わせてしまった運の悪い一般生徒を演じる作戦だ。

《人狼》^{ウルフマン}達も、突如^{とつじょ}現れた僕に面くらっている様子だし、この調子でタイミングを見計らって、逃げ出せるはず。だがその時、予想外の事が起こった。

絡^{から}まれていた女子生徒が、《人狼》^{ウルフマン}達の意識が僕に向かっているのに気付くと、素早い動きでその場から走り出したのだ。

一瞬だった。《人狼》^{ウルフマン}達の間を潜^{くぐ}り、僕の脇^{わき}をすり抜け、彼女は逃げて行った。

先に見事、タイミングを見計らわれてしまった。

……つていうか……ええ！ ちよつと待って！

僕にこの状況を押し付ける気か!?

走り去っていく女生徒の背中を見送る事しかできない僕。

次の瞬間、物凄ものすごいい力で背後に引つ張られたのがわかった。

何をされたのかは、まあ、考えなくてもわかる。

《人狼ウルフマン》達に、今度は僕が困まれてしまったというわけだ。

「よう、何のつもりだ？」

牙きばの生え揃そろった口元に、三白眼さんぱくがんの双眸そうぼうが、眼前を支配する。

「えーと、いや、別に……な、何があつたかは知りませ
んがおんびん穩便に話し合いましたようよ」

あーもー、しんどいなー!

僕は普通の生活を送りたいんだよ!

それは何故なぜかというと、こういう事に巻き込まれたく
ないからなんだよ!

ニコニコと平静を装った顔をしながら、内心で絶叫す
る僕。

瞬間——その場に、何か圧力のようなものが発生した。
「う、え?」

重力が倍加したような、空気かたまりの塊が頭上から降つて
きたかのような——そんな、体にかかる重みの変化を、

僕も、三人の《人狼》^{ウルフマン}達も感じ取る。

そして気付く。その圧力……否、〃威圧感〃を放つ張本人が、こちらへと近付いてきている事を。

「やばい……」

袋小路の入り口からやって来るのは、桐条莉央だった。おそろく、先程飛び出して行った女子生徒を見て、気になって来てみたらこの状況を発見した、という感じだろうか。考えている内に、彼女は僕達の所まで到達する。そしてその手が、僕の襟^{えり}を掴^{つか}み上げている《人狼》^{ウルフマン}の腕に、そつと添えられた。同時、鋭い眼光が向けられる。

「彼を離してください」

たった一言。その一言に、三名の《人狼》^{ウルフマン}達は怯^{ひる}む。

僕も怯む。

「おい、ガウルン！　流石さすがに、《勇者》に手を出すのはやばいつて！」

僕を掴み上げている《人狼ウルフマン》——ガウルンと呼ばれた彼が、この三人のリーダー格なのだろう。仲間にそう制止されたガウルンは、莉央様を前にして完全に気圧けおされている様子だ。その気持ちわかるよ。

「う、うるせえ！　《勇者》がなんだ！」

しかし、ビビりあがりながらも、ガウルンは自身を鼓舞こぶするように吠えほ上げる。

「余計な口出ししてんじゃねえ！」

僕を掴んでいた手が乱暴に離される。その場に落下す

る僕の視界に飛び込んできたのは、ガウルンの拳が莉央様へと真っ直ぐに放たれた瞬間だった。振るわれるウルフマンの剛腕。空気を唸らせるほどの迫力。だが、ガウルンの拳が振り抜かれた先には、既に莉央様はいなかった。

彼女は、目にも留まらぬ速度でガウルンの背後に回り込むと、腰の『聖剣』を抜いていた。刀身そのものが光を放っているかの如き、豪壮たる刃が駆け、そのまま彼の首筋へと打ち付けられる。

「ごはっ！」

その一撃で、ガウルンの巨体は膝をつき、地面へと崩れ落ちる。首が落ちていないところから察するに、峰打

ちだったのだろう。『聖剣』の仕組みはよくわからないけど、あるんだ、峰。

すべてが一瞬の出来事だった。誰も何も反応できない。僕も、他二名の《人狼》^{ウルフラン}達も、その光景を前にして、ぽかんとしている事しかできなかつた。

そこで、莉央様の視線が、残りの《人狼》^{ウルフラン}達に向けられる。びくりと、ここにきて自分達の置かれた状況を理解した彼等は。

「す、すいませんでしたあ!」

気絶したガウルンを両サイドから担ぐと、すぐさま退散していった。

……^{せいじやく}静寂がその場を……僕達二人しかいないその場を

包む。

莉央様は、地面に腰を落としたままの僕を、黙って見下ろしている。

まるで、ハイエナ共を追っ払い、自分の獲物を手に入れた肉食獣の如く。

僕は内心で人生の終了を覚悟した。

「こっちです!」

その時、遠くの方から声が聞こえた。さっきの女子生徒だ!

おそらく、教師か警備員か、助けを呼んできてくれたようだ。

グッジョブ女子生徒!

流石の桐条莉央も、衆目下しゅうもくかで僕を公開処刑には……。そこで、莉央様はその手を伸ばし、僕の腕を搦んだ。「え？」

搦むと同時に、彼女は軽やかにステップでも踏むように、地面を蹴ける。

「え？」

彼女と共に、僕の体は空高く飛翔ひしょうした。

「どええええええええ!?」

眼下、僕達がいた校舎裏の突き当たりに、教師を連れた女子生徒が到着した。

「こっちです！ 私が不良の人達に絡まれてるのを助けてくれて、その人が身代わりに……あれ？」

「誰もいないけど……」

「……遠退とおのいていく彼女達の会話を聞きながら、泣きそうになる。」

「……やっぱり」

そこで、頭上から声が降ってきた。

地上の女子生徒達の姿と、その会話を彼女も聞いていたのか——莉央様は、その顔を、微かすかに紅潮こうちようさせて言った。

「やっぱり、あの日私を助けてくれたのも、村野さんだったんですね」

確定だ。僕があの日ゲーセンで会ったのは彼女で、彼女もあの時出会った男が俺だと、確信したのだ。

どこか嬉しうれそうな彼女の様子。それはきつと、獲物を捕獲したハンターの喜色きしよく。

僕はこれから、一体どうなってしまうのだろうか……。

* * *

転落防止のための高い柵さくを飛び越えて、僕と莉央様が着地したのは、校舎の屋上だった。風の音と給水塔の稼働音が聞こえるだけの世界だ。

莉央様は、パツと搦んでいた僕の腕を離す。僕はすぐさま周囲を見回した。

他には誰も見当たらない。ここにいるのは、僕と、彼

女だけだ。周囲に広がるのは青空と学校の敷地の風景のみ。助けは呼べそうにない。

……どうやら、覚悟を決めなくてはならないらしい。

「やっとな……」

莉央様が、僕に背を向けたまま喋り始めた。聞く者にどこことなく緊張感を齎す、あの威厳たつぷりの声音で。

そして、振り返る。

「やっとな、ゆっくりお話ができませんね……村野さん——」

「すいませんでしたあー！」

僕は既に土下座の姿勢を取っていた。

流石の莉央様も、僕のいきなりの土下座に面くらって

いるのだろう。動揺している雰囲気伝わってくるが、今はともかく誠心誠意謝るしかない。

「何をしでかしてしまったのかわかりませんが、莉央様のお怒りに触れてしまったようので、申し訳ございませんん！どうかどうか、せめて命だけは！」

まるで過剰な年貢ねんぐの取り立てに対し悪代官へ直訴する村民だな……などと我ながら考えていると……。

「あ、あの、顔を上げてください」
頭上から降ってきたそんな言葉に、僕は恐る恐る顔を上げる。

莉央様は、両手をこちらへと伸ばし、半屈はんかがみの姿勢で、あたふたしながら僕を窘たしなめようとしている。いつも無表

情で、凜然^{りんぜん}としていているイメージしかないため、途轍もな
く違和感のある……いや、新鮮な姿だ。

「その、村野さんに謝ってもらおうような事はされていま
せん。むしろ逆です」

土下座の姿勢も疲れてきたので、お言葉に甘えて立ち
上がると、莉央様は語り出す。真正面から、どこか熱の
籠^{こも}った視線で僕を見据えながら。

「私は先日、貴方^{あなた}に助けてもらったのです」

……鶴^{つる}か？

いやいや、そうじゃなくて。どっという事だ？

ちんぷんかんぷんな様子の僕を察したのか、彼女は慌
てて補足する。

「先日……生まれて初めて、ゲームセンターを訪れたのです。子供の頃からの夢で、是非^{ぜひ}一度行ってみたくて……そこで、クレーンゲームが上手^{うま}くできず、右往左往^{うおうさおう}していた私を、村野さんが助けしてくれたのです」

「……ああ」
なるほど、そういう事か。

「それにその後も、あの不良の方々に因縁^{いんねん}を付けられてしまったところを、私を庇^{かば}って自分だけで解決してくれようとして……とても嬉しくて、お礼を言いたくて……」

それで、ずっと僕を見詰め続けていたという事か。話すタイミング^{うかが}を窺^{うかが}って。

言われてみれば、確かにその通りなのだが……いやまさか、感謝されているとは思わなかった。

僕自身も、別に感謝されようと思っただ事ではなかつたし。むしろ、大事になるのは好きじゃないし面倒臭いから、丸く収めようと思っ……つまり、自分のためにやった事だし。

「……私、初めてだったんです。ああやって、普通に話し掛けてもらえたの」

きりつとした面貌を崩し、彼女は微かに破顔する。本当に、心底感動したというように。

「今まで、クラスメイトや同じ年代の方で、誰かと対等に、普通に会話できた事などありませんでした。なのに、

村野さんはあの日、困っていた私に臆せず接してくれて、正義感があつて、優しくて勇敢で……凄い人です」
何やら、凄く熱い視線を送ってくる《勇者》様。少し空いていたはずの距離も、いつの間にか近くなっている。隣の席よりも至近距離だ。

潤んだ瞳や、香ってくる良い匂いが、心臓を高鳴らせる。

「昨日からずっと……いえ、あの日からずっと、お願いしたい事があつたのです」

狼狽える僕へと、莉央様は更に接近してくる。近い近い！

やばいつて！ 胸が引っ付きそう！

なんだ!? この僕に、まだ何を望むというんだ!?

「お願いします」

清廉可憐。秀丽皎潔。異世界を救った生きる伝説。僕とは住む世界の違う……交わるべきではない存在。

《勇者》——桐条莉央は、僕の手を取り、目を真っ直ぐ見詰め、力強い声で言った。

「わ……私と、友達になつてください!」

GA文庫8月刊『勇者様が友達になりたそうにこちらを見ている!』の試読版はここまで。

このあとの続きは、本編でお楽しみください!